第11回太平洋学術会議

太平洋学術会議は，太平洋沿岸の諸国を中心として設立された太平洋学術協会 Pacific Science Association の主催で開かれるもので，1920年，ホノルルで第1回会議が行なわれたあと，4年ごとに各国持ちまわりで開催されてきた．日本では大正15年に第3回会議が東京で開催されたが，その第11回会議が昭和41年8月下旬から9月上旬にかけて，ふたたび東京で催されることになっている．

この会議は普通の専門別の国際会議にくらべると，規模がひとけた大きくて，10ぐらいの国際会議が一斉に開かれるものと考えてよい．今回の会議の運営のために，太平洋学術協会の日本代表機関である日本学術会議の太平洋学術研究連絡委員会が中心となって，第11回太平洋学術会議組織委員会を設け，日本学術会議会長を委員長として会議の準備にあたっている．

この会議でとりあげる科学の分野はかなり広くて，第11回の組織委員会では，これを次のように分類している．そして，各部門ごとにかなり自主的に運営することになっている．

第Ⅰ部門	気象	第Ⅶ部門	水産
第Ⅱ部門	海洋	第Ⅷ部門	医学
第Ⅲ部門	地球物理	第Ⅸ部門	社会
第Ⅳ部門	地質	第Ⅹ部門	人類
第Ⅴ部門	生物	第Ⅺ部門	地理
第Ⅵ部門	農学	第Ⅻ部門	情報

会議の内容

会議は8月22日（月）の開会式に引き続いて，主として東京大学を会場として行なわれる．第1週は太平洋地域における科学上の問題をテーマにした，約60の Symposium が行なわれ，第2週は各部門ごとに，それぞれいくつかの Divisional meeting をもって，同じ専門分野の研究者間の研究発表，情報交換，親睦をはかることになっている．このほか，(1) 人口と食糧の問題，および (2) 公害問題，についての Congress Symposium と，海洋研究船その他をテーマとする五つの Special Symposium (tour を伴なうもの) が予定されている．

気象部門における計画

気象部門では，畠山久尚委員長，吉武素二幹事のもとに準備が進められている．第1週の Symposium は次の7題目で，それぞれの Symposium の convener の努力によって，すでに参加 Guest の顔ぶれもだいたいきまった．

(1) General circulation of the atmospherere in the Pacific area (正野重方，東大)
(2) Cloud physics in the Pacific area (磯野謙治，名大)
(3) Ice and snow in the Pacific area (吉田順五，北大)
(4) Satellite meteorology (山本義一，東北大)
(5) Physics of upper atmosphere (北岡龍海，気象庁)
(6) Agricultural meteorology (井上栄一，農技研)
(7) Tropical cyclones (荒川秀俊，福岡管区気象台)

カッコ内は convener.

第2週の Divisional Meeting では次の二つの題目がとりあげられる．

(1) Monsoon meteorology
(2) Other meteorological contributious

このうち，第二の題目では，特にテーマを指定しないで，一般の気象に関する論文の発表が行なわれる予定である．この Divisional Meeting では，Symposium Guest として参加する人を含めて，すべての気象学者が Contributor として論文を読む機会を与えられている（英語使用）．参加希望者は幹事あてに論文の題名とアブストラクトを付して申し込んでいただくことになるが，会場の都合により，論文発表者の数は約40人くらいに制限され，そのうち，日本人はだいたい3分の1以内ということになっているので，希望される方は一応吉武幹事（気象庁観測部）あてに連絡していただきたい．

また，太平洋学術会議と他の国際機関とが合流して行なう Concurrent Meeting として，気象部門では次の二つの会議が行なわれる予定である．

(1) WMO: Panel Meeting of Experts on Tropical Meteorology (気象庁)
(2) 国際雪氷会議: International Conference on Physics of Snow and Ice (8月15日～18日，北大低温研究所)

以上の会議で論文を発表しない人でも，auditor として登録されれば会議のメンバーとして参加することができる．なお，この会議については「学術月報」の最近号でも紹介されるはずである．（吉武素二）